column

学生の廃棄物に対する意識と行動(2)



埼玉大学大学院理工学研究科教授
河村 清史 KAWAMURA Kiyoshi

プロフィール
前 埼玉県環境科学国際センター研究所長。中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会浄化槽専門委員会委員、同水環境部会総量削減専門委員会委員などを歴任。
現在、廃棄物資源循環学会評議員、(社)日本環境衛生施設工業会理事など。

前回は、廃棄物の発生回避・抑制、リサイクルについて、実施していることや実施できそうなこと、また実施するうえでの問題点や改善点について、博士前期課程の学生に発表してもらった報告の中から、一般的な状況を紹介した。

学生には、定職に近い形でアルバイトをする(した)者や留学生もいる。今回は、彼らによる2つのアルバイトに絡む報告と1人の留学生の報告を紹介する。

アルバイトに絡む報告の1つは、大手の古本チェーン店でのごみ処理の話である。ここでは、ごみを通常ごみ(備品ごみ、ごみ箱のごみ)、廃棄品(在庫本、本やゲームの不良品)、持ち込みごみ(買い取りができない処分品)に分け、燃えるごみ、資源ごみ、不燃ごみに分別している。これらを市委託のごみ処理業者に回収してもらうが、会社全体で年間数千万円かかり、コスト削減の点から減量化と細分別化が課題である。減量化では、持ち込みごみは減らすことが困難であるばかりか、家庭ごみを捨てに来る人もいる。在庫本は新店立ち上げ時の商材にし、不良品はジャンク品として指定店舗で販売するが、在庫本のセット売りを強化しようとしている。細分別化では、例えばCDは、ケース、CD本体、ジャケットに分けることにより、処理費用を約10分の1に削減できる効果がある。客には見えないところでの実態が、垣間見られた。

アルバイトに絡む他の報告は、沖縄出身の学生のものである。沖縄では、乗れなくなった車を放置しておくことがよくあるが、彼は、このような車について所有者を探し出し、交渉し、買い取り、スクラップ場へ売って利益を得るという業の下で働いていた。スクラップ場で分別された鉄は、資源として利用される。根気がいる仕事であり、回収される鉄の量は多くはないであろうが、鉄資源回収の1つの形を形成している。

留学生の報告は、中国からの学生によるものである。彼女は、チュータに連れられて生活用品を買うためにリサイクルショップに行き、安くて質のよい中古品を色々揃えることができたことが、非常に印象的であったと言っていた。また、ある主婦から牛乳パックで作ったきれいなペン立てをもらったが、その主婦と話をして、リサイクルが彼女の生活の一部となっていることに感銘を受けたとも言っていた。自分もいずれ廃棄物の利用で何らかの貢献をしたいと締めくくったが、このような思いが、アジアでの3R推進における推進力の1つになればと期待したい。